

音声学資料としての映画
— 『マイ・フェア・レディ』 (1964) に見るコックニー方言 —

田 中 美和子*

Cockney in *My Fair Lady* (1964)

Miwako Tanaka*

Abstract

‘Cockney’, one of the least-valued accents in Britain, is well-illustrated in *My Fair Lady* (1964), which is based on the drama *Pygmalion* written by Bernard Shaw. In this paper we will focus on what features cockney has, examining the lines by a flower girl, Eliza Doolittle and her father. Accent was one of the factors that sustained ‘class barriers’ especially in those days as Professor Higgins says “‘Aoow’ and ‘Garn’ that keep her in her place”. We will also consider the role of cockney in the history of English.

キーワード

コックニー、方言研究、音声学

0. はじめに

0.1. 本稿の目的

アメリカに較べると、イギリスは地域英語(方言)の多い国である。英語の方言を学ぶには、テキストを読むだけでは不十分で、音声を確認する必要がある。しかし、フィールドワークで録音されたデータをみても、雑音や被験者の問題¹⁾などで音が不鮮明で聞き取りにくいことが多い。その点、映画は音声があり、特徴がそれとわかるように誇張されているため、英語学習者はアクセントの特徴を理解しやすいのである。本稿では、映画の持つこのような利点を活かし、音声学資料として映画を取上げて、分析してみたい。

米映画『マイ・フェア・レディ (*My Fair Lady*)』(1964)は、ジョージ・キューカー監督 (Cukor, George) の作品で、舞台はロンドンである。街角で花売りをしていた娘イライザが、ヒギンズ教授によって美しい英語とマナーを仕込まれ、最終的に大使館の舞踏会に出席するという物語である。この映画は、バーナード・ショー (George Bernard Shaw) の演劇『ピグマリオン (*Pygmalion*)²⁾』を原案に、アラン・ラーナー (Alan Jay Lerner) がミュー

*たなか みわこ：大阪国際大学法政経学部非常勤講師 (2005.6.30受理)

ージカル(初演1956年)のために一度、そして映画(1964年)のために再度書き直したものである。ラーナーによる『マイ・フェア・レディ』の脚本³⁾の中には、ショーの原案と同じ台詞が多く残されている。

では、自らの作品に、地域英語コックニー(Cockney)をとりあげた劇作家バーナード・ショーはどのような人であったのだろうか。ショー(1980)の「ある音声学者」と題する前書きの中には、次のようなくだりがある。

It is impossible for an English man to open his mouth without making some other Englishman hate or despise him. (Barnard Show 1980:5-7)

一人のイギリス人が口を開くと、必ず別のイギリス人がその人を憎悪するか軽蔑する⁴⁾

イギリス人は、社会的階層や教育の程度によって英語の発音が異なるので、話をすればそれらがわかってしまう。1.1節で詳しく述べることにするが、バーナード・ショーは、コックニーの描写にたけた劇作家であった⁵⁾。つまり、劇作家は台詞に人々の心を映し出すのであり、彼は発音だけではなくコックニーの人々の心を理解し、台詞の中で彼らを生き生きと描写することに成功しているのである。

『マイ・フェア・レディ』(1964)では、花売り娘イライザは、ロンドンの西の通り、リッソン・グローブ(Lisson Grove)の生まれである。音声学者ヒギンズ教授は、イライザたちの話し言葉を音声記号で書き取り、名探偵の如く出身を言い当てる。地域英語を用いるのは下層の労働者階級の者と決まっており、コックニーの話し手は、「ロンドン生まれで教育の無い無遠慮な人々」として侮蔑の対象であった。ヒギンズ教授は、彼女が貧しい暮らしから抜け出せないのは、ぼろ服や汚れた顔ではなく、英語の発音のせいだと嘲笑する⁶⁾。すなわち、下層階級の生まれであるイライザが、上の階級に上がるためには、標準英語を用いさえすればいい、と説いたのである。コックニーを用いている限り、「貧民窟の囚人(a prisoner of the gutters, p.22)⁷⁾」なのである。

コックニーは、映画では『マイ・フェア・レディ』(1964)、そして文学ではチャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)の諸作品が有名である⁸⁾。本稿では、音声学の資料として、すなわちコックニーの言語資料として『マイ・フェア・レディ』を取り上げ、詳細に分析していくことにする。

では、最初に、『マイ・フェア・レディ』(1964)の重要なモチーフとなるギリシャ神話の一つ、「ピグマリオン伝説」に言及しておこう。

0.2. ピグマリオン神話

『マイ・フェア・レディ』(1964)の原案はバーナード・ショーの戯曲『ピグマリオン』に由来しているが、物語の結末は『ピグマリオン』のそれとは、対照的である。

演劇およびイギリス映画『ピグマリオン』にはショーの脚本が用いられ、本人の解説⁹⁾によれば、タイトルはギリシャ神話のピグマリオンに由来する。ピグマリオンとはキプロス島を治める王の名で、彫刻家としても素晴らしい腕も持っていたので、ある日、心に描

く理想の女性を大理石¹⁰⁾の立像に彫ったのである。その彫像の乙女はガラテアと名付けられ、まるで生きているかのように美しく、女神アフロディーテによって命を与えられるのである。そして、二人は結ばれることになる。

ショーは、この男性が理想の女性を作り上げるギリシャの伝説の結末に捻りを入れて、女性が、作り主である男性を受け入れないという皮肉な結末を、戯曲『ピグマリオン』に描いた。すなわち、このような男の夢はかなわない、というショーらしいメッセージが読み取れる。

一方、『マイ・フェア・レディ』では、ここに重要な変更が加えられている。美しい英語と洗練されたマナーを身につけた後、イライザはヒギンズ教授(Higgins)とみごと結ばれるのである。従って、物語の主役は女性で、むしろシンデレラ・ストーリーの一つのタイプと解釈するのが自然であろう。タイトルを比較しても、ピグマリオンが変身を誘う男性を指し、マイ・フェア・レディ¹¹⁾が変身する側の女性を指し、それぞれ物語の焦点を、象徴的に表していると考えられる。但し、『マイ・フェア・レディ』のイライザがピグマリオン伝説のガラテアと異なるのは、常に自分の意志で人生を選んでいるところである。このように、アラン・ラーナーは、原案のショーのものとは異なる形で、ピグマリオン伝説にさらに変更を加えたと考えられる。

1. 音声学的背景

1.1. バーナード・ショーと英語音声学

バーナード・ショーは、言語には並々ならぬ関心を持つ劇作家であった。先に引用した警句は、イギリスの社会階級制度と英語の結びつきを皮肉ったものであるし、英語の綴りと発音の不規則性を皮肉り、fishは'ghoti'と書けるとも述べている。なぜなら、'gh'はlaughの [f]、'o'はwomenの [i]、そして'ti'はnationの [ʃ] で'ghoti(fish)' [fi] となるからである(中尾俊夫(1999(1989):18-9)。

実際、ショーはヨークシャー方言学会¹²⁾の会員であり、音声学者ヘンリー・スウィート(Henry Sweet, 1845-1912)も、彼と同じ学会員であった。本稿で取上げる『マイ・フェア・レディ』(1964)の原案『ピグマリオン』を書くにあたって、ショーはそこで知り合ったスウィートをモデルに、『ピグマリオン』のヒギンズ教授を描いたと言われている。スウィートは、音声学を確立したと言われている人であるが、変人で「ほろ苦氏(Bitter Sweet)¹³⁾」とあだ名で呼ばれる程で、「口の悪い英国劇作家」として知られるショーと似たところのあった人の様である。

さらに1926年、BBCが放送英語諮問委員会(Advisory Committee on Spoken English; ACSE)を作り、放送に用いる英語語彙の用法と発音を制定しようとした時、辞書編纂家C.T.アニアズ(C.T. Onions)らと共に、ショーも委員会のメンバーとなった。また、ショーの遺産の一部は、標準英語の全ての音に対応する40の記号を考案するための資金として用いられた(P.ライト.1983: 78)。

これらのことから、バーナード・ショー(1886-1950)が言語に並々ならぬ関心を持っていたことがわかる。また、彼は音声記号を用いずに、視覚方言¹⁴⁾によってコックニーを表

記しようと努めており、その表記は実に詳細なもので、その一部は、『ピグマリオン』を経て、『マイ・フェア・レディ』（1964）の中に受け継がれているのである。

イギリスは、教育条例の発布により、ショーが生きた19世紀末から20世紀にかけて標準英語が台頭し、一方、地域英語は無教育層や貧困層と結びつくという大きな変化が起こった。皮肉屋で有名であったバーナード・ショーは、標準的な英語を作るべくACSEに参加しながらも、一方で、世間の動きとは逆に地域英語のcockneyに興味と関心を持っていたのである。

1.2. 音声記号（視話法）

1.1節で述べたように、ヒギンズ教授のモデルは、実在の言語学者ヘンリー・スウィート(Henry Sweet, 1845-1912)である。『マイ・フェア・レディ』(1964)の中では、ヒギンズ教授による音声記録や、英語のレッスンの様子が描かれるが、これらには『ピグマリオン』にはない場面も多く、『マイ・フェア・レディ』の映画スタッフが、19世紀から20世紀初頭の音声学の様相-装置や音声記号などを詳しく調査して、さらに音声学的考証も踏まえて撮影されており、cockneyの記録としても信頼できるものである。

音声学の見地から考証を行ったのは、音声学者ピーター・ラディフォグット(Peter Ladefoged)であった。第一幕第一場、コベント・ガーデンで、ヒギンズ教授が手帳に発音を記号で書き込む場面がある。この時代には、現在一般に「発音記号」と呼ばれる国際音声記号(IPA)¹⁵⁾が成立しておらず、その代わりに「視話法¹⁶⁾」と呼ばれる様々な記号が発案されていた。ヒギンズ教授は手帳に記号を用いて音声を記録しているが、それらは、音声学者ラディフォグットによって書かれていたのである。

You can see some examples of Visible Speech in the film *My Fair Lady*. I was a technical consultant on the film, and wrote the transcriptions that can be seen in Professor Higgins's notebook. You can also see a chart of the vowels written in Visible Speech, which Professor Higgins uses when demonstrating the different vowels to Colonel Pickering. It was actually my voice that you hear saying the vowels, not Rex Harrison's. (Peter Ladefoged, 2002: 114)

ラーナーの脚本には「ベル式視話法(Bell's Visible Speech)」とある。これは、視話法の中でも特に、音声学者ベル(Melville Bell)¹⁷⁾が考案した音声記号形式を意味する。ベルの功績は、中でも、母音体系を舌の高さ(高・中・低)と位置(後舌・中舌・前舌)によって区別したことである。さらに、ラディフォグットは、ヒギンズ教授が母音をピカリング大佐に聞かせる場面(第一幕第三場)に言及し、この場面の母音の音声を担当したのは、ヒギンズ教授役の俳優レックス・ハリソン(Rex Harrison)ではなく、自身であったと述べている。また、この場面で用いられる母音チャートの視話法もラディフォグットによって学問的な裏付けがなされていた。したがって、本作品が、音声学の資料となり得ることは確かである。

但し、この場面では、ヒギンズ教授が「130種類の母音」を発音してみせたことになっているが、区別して発音しうる母音の数が130も存在するとは、映画のための誇張としか考えられない¹⁸⁾。現在、IPAは133の記号を有し、その内訳は子音の数が84、母音の数は29で、複合母音などを考慮しても、母音の総数は130には届かないであろう (Peter Ladefoged. 2002: 177)。

1.3. 音声学のための装置 1. 音叉 (tuning forks)

第一幕第三場において、音声学の装置が色々登場する。最初に登場する器具は、音叉である。ヒギンズ教授が130の母音を実演する場面では、書斎の壁一面に、多くの音叉が並んでいる。音叉は、音の高さを整えるために用いる器具であり、ヒギンズ教授は母音を発声する際、音叉を取り上げて鳴らしながら母音を調音していた。

ただし、ラーナーの脚本では、音叉 (tuning forks) の描写は以下のト書きにとどまっている。

There is a desk below the alcove upon which is a small bust of Plato, a mass of papers, *several tuning forks of different sizes*, and a telephone. (p. 32)

このように、ト書きにおいて「机の上に異なるサイズの音叉がある」と触れられているだけで、この場面では、脚本上、暗闇の中で、ピカリング大佐は、延々とヒギンズ教授から拡声器でレコーダーの母音の発声を聞かされていることになっている。このように、ラーナー (2003(1968)) の脚本と映画の内容は、細かい点では必ずしも一致しないことが多い。

1.4. 音声学のための装置 2. 蓄音機 (phonograph)

DVD『マイ・フェア・レディ』(2004)の付録にある製作関係者の解説¹⁹⁾を聞くと、蓄音機など、全ての装置が、単にこの映画の為に新しくデザインされたのではなく、特殊効果班と製作班がリサーチをして当時のものを採用したことがわかる。ただし、撮影の為、縁をチョークで色付けして回転する動きを強調したなど、映画のための部分的な誇張はあったようである。

次に、脚本と映像を照らし合わせてみる。すると、脚本上では2台となっている蓄音機が、映像では3台使われていることがわかる。以下は、第三幕第一場のト書きである。

Next to the door, is a small table upon which is *a recording machine and speaker horn*. (p.32)

Next to the desk is a small xylophone and *another recorder and speaker*. (p.32)

このように、脚本では、「ドアの隣のテーブルの上」と、「机の横」の二箇所に、角型スピーカーが付いた録音機 (recording machine) があることになっている。一方、映像では、

教授の書齋に3台の美しい蓄音機²⁰⁾を見ることができる。窓脇のチェスト上に黒、飾り棚横に緑色、さらに中央の書齋机の上には黒に金縁の蓄音機がみられる。どの蓄音機も角型スピーカーを備えており、蝋管(a cylinder)²¹⁾が既にセットされている様子である。蓄音機は、テープレコーダーやMDが発明されるより以前、蝋管の表面に音に対応する溝を刻み、電気的な振動を音として記録・再生していたのである。

2. コックニー(Cockney)の特徴

2.1. 地域英語と標準英語²²⁾

19世紀初頭のイギリスでは、人々の移動が無く、「地方訛り」すなわち「地域英語」の種類が多かった。しかし、18世紀に産業革命が始まり、田園地帯にいた農業労働者が工業都市へと移り住むようになると、地域英語が標準英語へと向かう動きが現れるようになった。また、18世紀には重要な英語の辞書²³⁾も出版され、書き言葉の標準化も進展した。そこへ、1870年に教育条例²⁴⁾が出され、初等教育が一般に行き渡るようになると、ますます標準英語化が進んだ。そこで、地域英語は、教育を満足に受けられない下層階級すなわち貧困層と結びつき、知的職業に携わる人々や地主などの中流階級または上流階級であれば標準英語を用いるという社会的構図が出来上がった。つまり、下層階級から中流・上流階級へと上昇することは、地域英語から標準英語への言語の転換を意味したのである。

19世紀初めには、まだ地方訛りは侮蔑の対象ではなく、誰も地方訛りを隠す必要はなかった。例えば、マクラム、マクニールとクラム(McCrum, MacNeil, and Cram. 2003 :13)は、ウィリアム・ワーズワース(William Wordsworth)はカンバーランド訛りで詩を朗読し、また第15代ダービー伯爵のスタンレー卿はランカシャー訛りで話したが、彼らを地域英語の発音のために軽蔑する者はいなかったと述べている。

ところが、言葉の標準化が進んだ19世紀末以降、地域英語の話し手は標準英語の話し手に比べて経済的にも知的にも劣る、という価値観が生まれた。したがって、コックニーの話し手たちは、勿論、下層階級に属する労働者として、映画の中で描かれているのである。

2.2. コックニーの歴史

コックニーとは、中英語のcokeney(cock's egg)に由来し、もともと「めめしい愚かな人」という否定的な意味の言葉であった(P.ライト1983: 72)。もともとコックニーはロンドン市中の共通の地域英語として広く用いられたが、19世紀末からは、下層階級の労働者の地域英語として定着し、粗野で無教養な印として侮蔑の対象となった。特に、ロンドン下町、セントポール大寺院東側、イースト・エンド(East End)²⁵⁾と呼ばれる地域で話されるのがそれである。マクラム、マクニールとクラム(McCrum, MacNeil, and Cram. 2003: 20)は、コックニーは、イギリスで最も軽視される四つの地域英語の一つで、他の三つは、リヴァプール方言、パーミンガム方言、そしてグラスゴー方言であると述べている²⁶⁾。

但し、地域英語、なかでもコックニーは、かつては粗野で無教養な言語とされてきたが、現代の言語学では、標準英語もコックニーも、それぞれ英語の変種(varieties)の一つで

あり、むしろ違いを明らかにするべきであると考えられる方向に向かっている。

さらにコックニーは、現在でも多くのロンドン市民に用いられており、ロンドンを訪れる観光客は必ず耳にするのだから、やはり分析の対象とする意味がある。また、ミック・ジャガー(Mick Jagger)のような中流階級出身のロック歌手がわざとコックニーを用いて労働者階級の出身であるかの様なポーズをとったこともあったし、またサッカーの花形選手であるデビッド・ベッカム(Devid Beckham)も自然にコックニーを用いて、下町出身であることを隠そうとしていない。最近では、BBCにも、標準英語を話さないアナウンサーがいるそうである²⁷⁾。これらのことから、イギリスの社会階級制度や人々の価値観が少しずつ変化していることがわかる。P.ライト(1983)が述べているように、地域社会の伝統を大切に思う心がある限り、地域英語が生き残ることは確かであろう。したがって、コックニーも、ロンドンの町に、永遠に生き続けていくと思われる。

2.3. コックニーの音声的特徴

先に述べたように、『マイ・フェア・レディ』(1964)は、男性が理想の女性を作り上げる神話ピグマリオンを下敷きとする映画である。ただし、ヒギンズ教授は彫刻家ではなく音声学者である。従って、彼は「理想の英語」を話す女性を作り上げた。彼は、ピカリング大佐との間で、コックニーを話すイライザに六ヶ月で「公爵夫人として通用する英語」すなわち標準英語を身に付けさせるという賭けをする。そして最終的に、ヒギンズ教授は賭けに勝つことになるのである。

本節では、街角の花売り娘イライザの台詞に表れるコックニーの音声的特徴を論じる²⁸⁾。そして、ヒギンズ教授が、それらをどのように矯正したのかを確認する。コックニーの音声的特徴は、中尾、寺島。(2002(1988))より、次の点で抑えることにする。

- 特徴① [w]の代わりに[v] : beware → bevare
 ② [θ]の代わりに[f]、[ð]の代わりに[v] : bath → baf, brother → bruver
 ③ [ɪŋ] の代わりに[in] : eating → eatin'
 ④ 声門閉鎖音(glottal)を使用する : butter → bu'er
 ⑤ 語頭の[h]の脱落 : head → 'ead
 ⑥ [ei]の代わりに[ai] : today's paper → [tədaiz paipə]
 ⑦ [i:]の代わりに[əi] : sea → [səi]
 ⑧ [i]の代わりに[e] : sit → [set] 中尾、寺島。(2002:142-3)

上の①から⑤までは子音、そして⑥から⑧までは母音に関する特徴である。また、特徴③に関しての補足であるが、マクラム、マクニールとクラム(McCrum, MacNeil, and Cram. 2003:15)は、ing [ɪŋ]の略式の発音がin' [in]になるのは、[h]の脱落と共に有名なコックニーの特徴だが、同じ発音が上流階級の英語にも見られると述べている。但し、中流階級の英語には見られない。その理由として、中流階級は、常に地域英語(下層階級の英語)の発音にならないように注意しているから、というのが彼らの説である。また、特

徴⑤に関する補足であるが、『マイ・フェア・レディ』(1964)では、語頭の[h]の脱落と共に、本来不必要なところに[h]が出没するという現象も扱っている。これは、P.ライト(1983)にも言及がある。

では次節で、イライザの台詞を具体的に取り上げる。但し、第一幕第一場においては、『マイ・フェア・レディ』(1964)における台詞だけではなく、『ビグマリオン』における台詞も取上げて、コックニーの音声の特徴を検討する。なぜなら、ショー(1980)のテキストにある一部の台詞には、視覚方言による詳細なコックニーの表記があるからである。

2.3.1. 第一幕第一場：イライザとフレディの家族との出会い

このコベント・ガーデンの場面では、美しく着飾った上流階級の人々と、花売りのイライザのような下層階級の人々の対比が描かれる。なお、ショー(1980)のテキストには、役名に後続してSと標記し、それぞれ引用のページ数を丸括弧で囲み付記することにする。

- (1) ELIZA: [wailing] Two bunches of violets trod in the mud! A full day's wages. Why don't look where you're going? (15-16)
- (2) ELIZA-S: Nah then, Freddy: look wh'y' *gowin*, deah. (02)
- (3) ELIZA-S: Theres menners fyer! Te-oo banches o voylets trod into the mad. (02)

(1)と(2)(3)を、比較しつつ検討してみよう。(1)には殆どコックニーの特徴は感じられない。一方、(2)(3)においては、特徴③が'gowin'に見られる。また、goが'gow'と標記されているのは、go[gou]を、聞いた音のまま視覚方言で'ow'と綴っていると考えられる(P.ライト.1983: 90)²⁹⁾。

- (4) ELIZA: [to Mrs. Eynsford-Hill] Oh, he's your son, is he? Well, if you'd done your duty by him as a mother should, you wouldn't let him spoil a poor girls flowers and then run away without paying. (16)
- (5) ELIZA-S: Ow, *ees* ye-ooa san, is *e*? Wal, fewd dan y' de-ooty *bawmz* a mather should, eed now bettern to spawl a pore gel's flahrzn than ran awy *athaht pyin*. Will ye-oo *py* me fthem? (2-3)

先に見た例と同様に、ラーナー(2003(1968))のテキスト(4)からはコックニーの特徴が認められないが、ショー(1980)のテキスト(5)からは、さまざまなものが認められる。例えば、he'sが'ees'、またheが'e'、そしてby him asが'bawmz'と綴られて[h]が脱落しているのは、特徴⑤からであるし、またyourが'y' [j?]'となり声門閉鎖音が採用されている。そして、withoutが'athaht'となり[w]が脱落しているのは特徴①に関連すると思われる、payingが'pying'、payが'py'と表記されるのは、特徴⑥によると考えられる³⁰⁾。

但し、ラーナー(2003(1968))のテキストでも、コックニーの特徴が描かれている。例えば、次の例には、特徴③による'nothin'(nothing)'や'speakin'(speaking)'がみられる。

(6) ELIZA: I ain't done *nothin'* wrong by *speakin'* to the gentleman! (17)

また、次の例には、特徴⑥による'tike (take)'があり、ヒギンズがこれを嘆いている。

(7) COSTERMONGER: Whatya *tike* me fer, a fool?

HIGGINS: [to Pickering] No one taught him 'take' instead of 'tike'.
Hear a Yorkshireman, or worse,
Hear a Cornishman converse.
I'd rather hear a choir singing flat. (21)

一方、ショー(1980)の台詞(2)(3)と(5)には視覚方言が見られたが、(6)と(7)に対応する台詞は標準英語に修正されているため、ここでは検討しない。

2.3.2. 第一幕第三場：ヒギンズ教授によるイライザの授業

イライザは、とうとう英語を勉強する決心をして、ヒギンズ教授をウィンポール街の自宅に訪問する。次の台詞の中で、for themは'for'em'と表記されている。

(8) ELIZA: And to pay *for'em* too: make no mistake. (35)

これは特徴②に関連する現象だと考えられる。また、次のように、不必要なところでhが付加され、eighteenは'heighteen'と表記されている。

(9) ELIZA: . . . A lady friend of mine gets French lessons for *heighteen* pence an hour from a real French gentleman. (36)

この現象は、P.ライト(1983:95)でも取り上げられ、特徴⑤によってロンドン子は自分の発音には[h]が足りないと感じており、[h]を補って正しく話そうとするあまり、不必要な場所にまで[h]を挿入してしまう現象であると分析している。

2.3.3. 第一幕第四場と第五場：父親ドゥーリトル

ここでは、イライザの父親ドゥーリトルが登場する。彼の台詞に見られるコックニーの特徴をいくつか挙げておく。

(10) DOOLITTLE: Professor 'iggins? (52)

コックニーの特徴⑤のため、語頭の[h]音が脱落して、ヒギンズ教授と言えず、「イギンズ教授」となる印象的な場面である。

(11) DOOLITTLE: No, I can't *afford 'em*. (55)

特徴②に関連して、[ð]が脱落し、*afford them*が'*afford 'em*'と表記されている。

(12) DOOLITTLE: I never thought she'd clean up so *good-lookin'*... (57)

(13) ELIZA: Here! What are you *doin'* here? (57)

これらはどちらも、特徴③によってng[ŋ]の代わりにn'[n]が用いられている例である。他の父親ドゥーリトルの台詞には、parent (parient, 54)や、against (agenst, 55)などの視覚方言が見られるものの、2.3節であげた①～⑧までの他の特徴にあてはまるものは見当たらなかった。

次にイライザの台詞を検討する。イライザも、父親同様、ヒギンズ教授の名前をうまく発音することができない。

(14) ELIZA: Just you wait '*enry 'iggins*, just you wait.

You'll be sorry but your tears'll be too late. (59)

特徴⑤によって、語頭の[h]が脱落し、Henry Higginsが'*enry 'iggins*'となるところは(10)と同じである。

では次に、ヒギンズ教授の授業において、イライザの発音矯正のために用いられた幾つかのフレーズを取上げる³¹⁾。以下は、特徴⑥の矯正のための練習文である。

(15) ELIZA: The *rine* in *spine sties minely* in the *pline*.

HIGGINS: [correcting her] The rain in Spain stays mainly in the plain. (60)

ヒギンズ教授も指摘している通り、イライザはrainを'*rine*'、Spainを'*spine*'、staysを'*sties*'、mainlyを'*minely*'、そして最後にplainを'*pline*'と、全て[ei]を[ai]で発音している。また、子音の閉鎖音[s]や[p]にも気音が出ないという問題があり、小さなバーナーの炎の揺れを見て、自分の発音を確認するよう指導を受けている³²⁾。

次も同様に、特徴⑥に関連するやりとりがみられる。

(16) ELIZA: Didn't I *sy* that?

HIGGINS: No, Eliza, you didn't '*sy*' that. You didn't even '*say*' that. (60-61)

また、特徴⑥に関しては、イライザの授業の様子を聞いていたピカリング大佐が、うっかり誤ってコックニーの特徴⑥を用いて発話する場面がある。

(17) PICKERING: And did you try the *pline* cake? [Higgins looks at him in horror

and then turns to Eliza] (63)

ここでpline [plain]とは勿論、plain [plein]のことである。

次の練習文は、特徴⑤の矯正のためのものである。イライザの台詞からは、本来必要な語頭の[h]が全て脱落し、不必要な[h]が挿入されていることがわかる。

(18) HIGGINS: Now Listen carefully; in Hertford, Hereford, and Hampshire,
hurricanes hardly ever happen.

ELIZA: In 'ertford, 'ereford, and 'ampshire, 'urricanes 'ardly hever 'appen. (61)

そして第五場の最後に、イライザはコックニーの矯正に見事成功する。従って、台詞にコックニーの特徴が見られるのは、主としてここまでである。

2.3.4. まとめ

2.3.節であげたコックニーの特徴①から⑧に適合するものを、テキストの中から挙げて検討してきた。特徴①は、チャールズ・ディケンズの小説にもよく描かれ、コックニーと強く結び付けられるものであるが、本作品では見ることができなかった。コックニーも時代の流れと共に変化しており、P.ライト(1983: 98-99)も、①の交替はすぐに消滅したと述べている。彼が1952年に行った調査では、特徴①はみられず、ディケンズなどの作品で描かれているだけであると言う。

特徴②に関しても、『マイ・フェア・レディ』には [θ]や[ð]の脱落は見られたが、[f]や[v]との交替は見られなかった。ただ、thと綴られるこれらの音は、世界の言語でも稀な音で、母語話者でさえ習得に苦勞すると言われている。そこで、幼少期にこの音の獲得に失敗すると、一生threeと言えず'free'、またI thinkと言えず'I fink'となることもある様である。また、P.ライト(1983: 98)によれば、16世紀以来、有声のth(すなわち[ð])を避けて[d]で代わりをさせる傾向があり、コックニーでは [d]と[ð]の混合音が発せられることが多いそうである。従って、テキストに見られた[θ]や[ð]の音の脱落も、複雑な音を避ける一つの方法として、選択されたのではないかと思われる。

特徴③④⑤⑥に関しては、問題なく確認ができたと思う。⑦と⑧に関しては、残念ながら十分な資料が得られなかった。なお、コックニーの発音に関して、①～⑧に挙げられていなかった特徴もある。それらについて、ここで少し触れておこうと思う。

第一に、二重母音[ou]が[au]³³⁾に変化する現象である。ラーナー(2003(1968))では、コックニーのリズムと躍動感を出すためか、間投詞ohのコックニーの発音に対して、次のように複数の表記を試みている。

(19) ELIZA: Aaaaoooww! (15) [Oh]

(20) ELIZA: Aooooooooooooow! (20)

(21) ELIZA: A-o-o-o-w! (20)

(22) ELIZA: *Ah-ow-oooh! ...Aaah-ow-oooh! ...Aaaaaaah-ow-oooh!*

..Aaaaaaah-ow-oooh!! (24-25)

(23) ELIZA: *Ah-aah-oh-ow-ow-oo!* (35)

このようにコックニーには、二重母音[ou]が[au]に変化するという特徴もある様である。

また、P.ライト(1983:94)は、コックニーの弱母音 [ə] は非常に広母音であると述べている。従って、次のように、ストレスの無い位置にくる母音は弱化して [ə] で代用されると考えられる。従って、以下の例において、for[fɔr]は[fəɹ]と発音されるのであろう。

(24) A BYSTANDER: Better give him a flower *fer* it. (16)

(25) COSTERMONGER: Whatya tike me *fer*, a fool? (21)

(26) MRS HOPKINS: Knocked me *fer* a row of pins, it did. (48)

前置詞など機能語は、基本的に弱く発音される傾向があり、コックニーではその傾向が強く、規則的に出るのではないだろうか。

以上、本節では、2.3.節であげたコックニーの特徴①から⑧に適合する例を検討し、また①から⑧に含まれない音声的特徴についても、ラーナー(2003(1968))のテキストから資料が採れる範囲で検証した。発音が複雑な子音を、より単純な他の音で間に合わせようとする傾向は一般に見られるが、コックニーではそれがより顕著に現れるようである。

3. 終わりに

視覚方言によって、『マイ・フェア・レディ』(1964)の脚本に記されたコックニーには、上記の様な特徴が見られた。是非にかかわらず、音声学教授ヒギンズ教授はイギリスの階級社会の物差しとして、英語の発音が有効だと考えている。つまり、階級社会制度はあるが、「美しい英語」さえ身に付ければ、下層に属する者でも、中流、上流階級へと上っていける可能性があることを示している。それならば、一体イギリスの階級社会とは何なのだろうか。単に英語を美しく発音さえすれば、より知的で教養があると言えるのであろうか。

このような社会を描きながら、結局、バーナード・ショー(1980)は、階級は違っても人間としては変わりがない、階級だけで人間の価値は変わらないし、上流階級の人間が下層階級の人間より幸せとは限らないという、社会階級制度の裏側を見せてくれたように思う。

最終的に、大使館の舞踏会の場面、第二幕第一場において、ヒギンズは、イライザの英語が弟子カパーシー(Karpathy)によって次のように診断されたと述べている。

(27) HIGGINS: Thanks Heavens for Zoltan Karpathy . . . (104)

HIGGINS: . . . *Her English is too good*, he said. Which clearly indicates that she is foreign. [. . .] I can tell that she was born Hungarian! Not only Hungarian, but of royal blood, she is a princess! (106)

すなわち、半年前には、路上で花を売っていた彼女の英語は、ハンガリーの王女として通るレベルに達したのである。さらに、カバーシーの台詞の中の“Her English is too good”という見解も非常に興味深い。これは、イギリス人なら不完全な英語を話すはずだということである。標準英語とは、19世紀になって、地主や教育ある中産階級の子弟がパブリックスクールで上流階級と混ざって教育を受けるときに、上流指向から「正しい英語」として作られたものであり、そもそも人工的な側面を持つものなのである。

以上、本稿は、映画脚本のテキストを、地域英語の言語資料として分析した。具体的には、イギリスはロンドンの地域英語コックニーを、米映画『マイ・フェア・レディ』(1964)を通して、検討したわけである。映画化のための誇張も多少あったものの、音声学としての裏付けも十分ある。英語学習者にとってアクセントの特徴を理解しやすいことから、映画が単に娯楽としてではなく、音声学資料として評価しうることを示した。

〈注〉

- 1) 例えば、被験者が風邪を引いていたり、早口であったり、年配者で小声であったり、話す内容が内輪の出来事であったりなど。
- 2) 原作となる舞台『ピグマリオン』の初演は1913年である。さらに、イギリス映画『ピグマリオン』(1938)が、同じくバーナード・ショーの脚本で、原作に忠実に製作されている。
- 3) 映画に挿入される歌の歌詞には『ピグマリオン』の台詞からの引用が多い。
- 4) 拙訳による。以下も同様である。なお、この警句は、マクラム、マクニールとクラム(2003:12)でも、有名なショーの警句として引用されている。
- 5) P.ライト(1983:78)を参照。
- 6) “It’s ‘Aoow’ and ‘Garn’ that keeps her in her place, not her wretched clothes and dirty face. (p.22)”
- 7) 『マイ・フェア・レディ』(1964)からの引用、文中の幕数およびページ数は、アラン・ラーナー2003(1968)『マイ・フェア・レディ』(清野暢一郎編注) 東京：英光社から採用し、著者が和訳を行った。
- 8) 『ピックウィック・ペーパーズ(Pickwick Papers)』のウェラー(Samuel Weller)は有名である。ウェラーは、wの代わりにvを好んだ。例えば、whenは‘ven’となり、whisperingは‘visperin’となる。ドイツ語と似ていることにも注目したい。
- 9) イギリス映画『ピグマリオン(Pygmalion)』(1938)を参照。
- 10) 黄金という説もある。
- 11) このタイトルの由来に関しては、著者の知る限り二つの説がある。一つには、マザーグースの“London Bridge”の歌詞に由来するという説、もう一つはハイドパーク東に社交界華やかなMayfairという地域があり、これをコックニーで読むとMayfairが‘myfair’になるという説である。但し、どちらの説であっても、このタイトルが文字通りの意味からイライザを直接的に指していることは間違いないと思われる。
- 12) イギリスで最古の方言学会と言われている。(P.ライト.1983:78)
- 13) 清野暢一郎.2003(1968)「はしがき」『マイ・フェア・レディ』Lerner, Alan Jay. (清野暢一郎編注) 2003(1968)『マイ・フェア・レディ』 東京：英光社, p.4.
- 14) 「視覚方言(eye dialect)」は、視覚訛りとも言われる。話者がある地域の住人である、或いはその出身者であることを示すため、語の綴りをその人の発音通りに表記する文学上の手法の一つである。例えば、‘Aoow’はoh, ‘Garn’はgo onを表す視覚方言の表記である。
- 15) 国際音声記号(IPA: International Phonetic Alphabet)は、国際音声学協会で1888年に定められた。最近では1993年に改訂され、さらに1996年にも訂正されている。

- 16) 「視話法」とは、言語音を視覚化するための音声記号体系を指す。
- 17) ベルは、『視話法 (Visible Speech)』(1967)を著した。
- 18) 関西外国語大学元教授 小泉保先生の個人談話による。(DVD 00:27:30-3)
- 19) DVD 『マイ・フェア・レディ』(2004; Disc 1)を参照。
- 20) ヒギンズは、ト書きには「録音機(recording machine)」と書かれているが、ヒギンズ教授は、台詞の中でこれを「蓄音機(phonograph)」と呼んでいる。これに従い「蓄音機」としておく。
- 21) 蠟が塗られた円筒。
- 22) 「標準英語(standard English)」とは、教養ある階級に用いられ、社会的・政治的に認められている英語を指す(『英語学用語辞典』1999: 593)。
- 23) 1755年にサミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson)の『英語辞典 (A Dictionary of the English Language) 1』が出版され、正字法(orthograph)が言われるようになった。書き言葉の標準化は、それ以前、1700年までにはほぼ固まったと言われている(マクラム, マクニールとクラム (McCrum, MacNeil, and Cram. 2003)。
- 24) 1870年、ビクトリア女王在位の時期に教育条例(the Education Act)が発令され、国家による初等教育が始まった。
- 25) 西側はウェスト・エンド(West End)と呼ばれ、経済的に豊かな階層が住む。
- 26) ちなみに、最も容認度の高い地域英語としては、ダブリンのアイルランド語、エディンバラのスコットランド語が挙げられている(p.20)。
- 27) 日本でも、特に地方局には、地元の方言を意識的に用いるアナウンサーが親しみやすく人気を博している。
- 28) コックニーには、例えば二重否定で否定を表す(I ain't done nothin' wrong)ことや、所有格の代わりに目的格を使う(Me doctor(25:16))ことなど文法的な特徴もある。
- 29) 同様に、第一幕第五場において、イライザが母音の練習をする場面で、AEIOUを次のように発音する。ELIZA: Ahyee, E, Iyee, Ow, You. (58)
- 30) この特徴⑥に関して、ラディフォギット(2002(2001): 46; 90; 122)は、コックニーのmate; bay; fate; lateはそれぞれ標準英語のmight; buy; fight; lightの発音にかなり類似しているが、コックニーの話者がこれらを混同することは無いと述べている。
- 31) これらのフレーズは、ショー(1980)『ピグマリオン』には見られないものである。
- 32) コックニーの特徴としての子音の[s]や[p]に関する記述を見つけることは出来なかった。
- 33) ショーによる表記では[æw]となる(P.ライト.1983: 90)。

〈引用文献〉

- 荒木一雄(編). 1999. 『英語学用語辞典』東京：三省堂.
- Ladefoged, Peter. 2002(2001) *Vowels and Consonants – An Introduction to the sound of languages*. Massachusetts and Oxford: Blackwell Publishers.
- A.ラーナー. (Lerner, Alan.) 2003(1968) 『マイ・フェア・レディ』(清野暢一郎編注)東京：英光社.
- McCrum, Robert, MacNeil, Robert. and William Cram. 2003(1987) *The Story of English*, 3-rd revised Edition. New York and London: Penguin Books.
- 中尾俊夫. 1999 (1989) 『英語の歴史』東京：講談社現代新書.
- 中尾俊夫, 寺島勉子. 2002(1988) 『図説英語史入門』東京：大修館書店.
- Shaw, George Bernard and Lerner, Alan Jay. 1980. *Pygmalion by George Bernard Shaw and My Fair Lady adaptation and Lyrics by Alan Jay Lerner*. New York: Signet Classic.
- P. ライト. (Wright, Peter.) 1983. 「コックニーの英語 (“The Dialect of Cockney.”)」松村好浩(編訳) .

音声学資料としての映画

『世界の英語 I イギリス諸島編』 研究社, pp.68-136.

〈DVD〉

- 『ピグマリオン(Pygmalion)』(1938)監督：アンソニー・アスキス/レスリー・ハワード,
(2000. 東京：株式会社アイ・ヴィー・シー.)
- 『マイ・フェア・レディ(My Fair Lady)』(1964)監督：ジョージ・キューカー,
(2004. 東京：ワーナー・ホーム・ビデオ.)